

主 題：すべての罪に勝る神の恵み2

聖書箇所：ローマ人への手紙 5章18－21節

パウロは5：12で「そういうわけで、ちょうどひとりの人によって罪が世界にはいり、罪によって死がはいり、こうして死が全人類に広がったのと同様に、——それというのも全人類が罪を犯したからです。」と言いました。ここで語り始めたことをパウロはもう一度18節から教えて行きます。その間の記事は挿入されているのです。パウロはいろいろなことを思い出し、また考えて、13節から17節までを記した訳ですが、もう一度この主題へと戻って行くのです。18節を見ると「**こういうわけで、ちょうど一つの違反によってすべての人が罪に定められたのと同様に、一つの義の行為によってすべての人が義と認められて、いのちを与えられるのです。**」と、また、パウロは同じように二つのことを対比しています。「**一つの違反によってすべての人が罪に定められた**」、同様に「**一つの義の行為によってすべての人が義と認められ**」と、読んでいただけでその対比に気づかれたことと思います。そして、19節でも同じことを繰り返しています。「**すなわち、ちょうどひとりの人の不従順によって多くの人が罪人とされたのと同様に、ひとりの従順によって多くの人が義人とされるのです。**」。こうしてこの二節を見るとパウロは二つのことを対比していることが分かります。

A. 二つの結果 18－19節

この二節は結果を対比しています。アダムの犯した一つの違反による結果と、イエスの成された一つの義の行為による結果とを比較しているのです。

1. アダムの行為とその結果

1) アダムの行為

この18－19節を見ると、アダムの行為が二つ記されています。一つは18節にある「違反」であり、もう一つは19節にある「不従順」です。これがアダムの行なったことである、総括するとこの二つであるとパウロは言うのです。

a) 違反

詳しい説明はこれまでにして来たので省きますが、「違反」ということばは「逸れる」という意味です。真理から逸れてしまうこと、脱線してしまうことです。創造主なる神が私たち人間をお造りになったのですが、その神のみこころから、神が望んでおられることから脱線してしまっている、それから外れてしまっているのです。そのことを「違反」ということばでパウロは説明するのです。

b) 不従順

そして、非常に関連していますが、19節に出て来る「不従順」は、創造主なる神の命令に従わなかったということです。このような行為をアダムが犯したのです。その結果、何が起こったのでしょうか？

2) アダムの行為がもたらした結果

a) 罪

アダムの行為によって、彼は人類に何をもたらしたのでしょうか？パウロが教えていること、それは「罪」です。「**すべての人が罪に定められた**」と18節に記されていました。この「**すべての人**」というのは、全人類を指しているということはずでに見ました。アダムの罪によって、その罪の汚染が全体に広がったのです。それには例外はないのです。ですから、どんなに立派な人でも、どんなに人々から尊敬を博する人であっても、人として生まれて来た以上、この罪の性質を持っているのです。「**すべての人が罪に定められた**」と、それがアダムが人類にもたらした結果なのです。

この「**定められた**」ということばですが、この名詞形は「罪に定める、有罪の判決を為す」という意味をもっています。ですから、「罪に定めた」とは、神ご自身がその人に対して「あなたには罪がある、あなたは有罪である。」と判決を下される、そのような宣告をなさる、私たちはそのような者になったのだとパウロは言うのです。初めに、12節で語り始めたことをこの18節から再び語っていると言いました。

「**ひとりの人によって罪が世界にはいり**」、今、私たちが見ていることです。アダムによって罪が全世界に、全人類に及んだ、そして、「**罪によって死がはいり、こうして死が全人類に広がった**」、だから、人間は皆死ぬのです。罪を犯す前、人間は永遠に死ぬ者ではなかった。しかし、罪を犯すことによって人はすべて死ぬ者となった。だから、「死ぬ」という事実は人間がすべて神の前に罪を犯している、神の前に有罪の判決を受けているということを実わしているのです。ここには例外が存在しないのです。

また、19節ではパウロはこのように言いました。「**多くの人が罪人とされたのと同様に**」と。「**罪人とされた**」という動詞は、「定める、制定する」ということばです。多くの人々が罪人と定められたと言います。

ですから、この二つの節を通してパウロが教えたかったことは、私たちにとって全く新しいものではありません。パウロはこのことを繰り返し教えて来ましたが、ここで改めてもう一度そのことを教えるのです。アダムによってすべての人間は例外なく有罪の判決を受ける者、また、罪に定められた者となったということを、パウロはこの二つの箇所では教えようとするのです。

2. イエスの行為とその結果

1) イエスの行為

a) 一つの義の行為 18節

パウロはこのように言いました。18節「**一つの義の行為によって**」と。アダムの場合は「**一つの違反**」でしたが、イエスは「**一つの義の行為**」だと言います。イエス・キリストの行為の中で神の前に正しくなかったことがあったのでしょうか？この「義」とは「正しい」という意味をもっています。ですから、イエス・キリストの為さった行為の中で正しくない行為があったのかどうかということではなくて、その人生そのものが神の前に正しかったイエスが、その中で一つ特出すべきこと、私たち人類に、罪人に大きな影響をもたらした出来事、それは「**罪のためのいけにえ**」だということです。そのことがこの5：6に「**私たちがまだ弱かったとき、キリストは定められた時に、不敬虔な者のために死んでくださいました。**」と記されている通り、イエス・キリストが罪深い私たちのために身代わりとなって死んでくださったのです。8節にも「**しかし私たちがまだ罪人であったとき、キリストが私たちのために死んでくださったことにより、神は私たちに対するご自身の愛を明らかにしておられます。**」と教えています。10節でも「**もし敵であった私たちが、御子の死によって神と和解させられたのなら、和解させられた私たちが、彼のいのちによって救いにあずかるのは、なおさらのことです。**」とあります。もちろん、この7節でも9節でも同じことが繰り返されています。つまり、主イエス・キリストは罪人である私たちの身代わりとなって十字架で死んでくださった、その一つの義の行為をパウロはここで上げているのです。

b) 従順 19節

イエス・キリストの行為をもう一つ19節で見ました。それは「**従順**」でした。アダムは神に対して不従順でした。しかし、主イエス・キリストは神に対して従順であったと言うのです。そのことはイエス・キリストの生きざまだけでなく、イエス・キリストの証を見ると、私たちは何度も教えられて来しました。イエスはヨハネの福音書の中でこのようなことを人々に言いました。4：34「**わたしを遣わした方のみこころを行ない、そのみわざを成し遂げることが、わたしの食物です。**」。

(参照：ヨハネ5：30「**わたしは、自分からは何事も行なうことができません。ただ聞くとおりにさばくのです。そして、わたしのさばきは正しいのです。わたし自身の望むことを求めず、わたしを遣わした方のみこころを求めますからです。**」、マタイ26：39「**それから、イエスは少し進んで行って、ひれ伏して祈って言われた。「わが父よ。できますならば、この杯をわたしから過ぎ去らせてください。しかし、わたしの願うようではなく、あなたのみこころのように、なさってください。」**、同じ42節「**イエスは二度目に離れて行き、祈って言われた。「わが父よ。どうしても飲まずには済まされぬ杯でしたら、どうぞみこころのとおりをなさってください。」**)。

イエスがそのことをいかに大切にしておられたのかというその告白です。同じヨハネ6：38でも「**わたしが天から下って来たのは、自分のこころを行なうためではなく、わたしを遣わした方のみこころを行なうためです。**」と言っています。自分のやりたいことをやるのではなく、「**わたしを遣わした方のみこころを行なうため**」にわたしは来た。ピリピ2：8では皆さんよくご存じのように「**キリストは人としての性質をもって現われ、自分を卑しくし、死にまで従い、実に十字架の死にまでも従われたのです。**」とあります。イエス・キリストの生涯をひと言で言うなら、まさに、この一つの節にそのことがすべて要約されています。神である主イエス・キリストが人としてこの世にお生まれになるのは、父なる神のご計画であり、その計画に沿ったことです。そして、ご自分がすべての主権者である神でありながら、仕える者となって父なる神のみこころを行ない、死にまでも、十字架にかかって私たち罪人の身代わりとなって死ぬというそのすべてにおいて、彼は従順に主に従って行かれたと言うのです。ですから、イエス・キリストのその行ないを見た時に、彼は父なる神の前に常に正しいことを行ない続けておられ、そして、父なる神のみこころに従い続けて来られたことが分かります。このように完全なお方だから、罪がないお方だから、私たち罪人の身代わりに、その罪の贖いを成し遂げることが出来たのです。

世の中はイエス・キリストの神性を否定します。イエスが神であることを否定します。しかし、聖書はそのように教えています。ある人々は、イエス・キリストの人間性を否定します。イエスは人ではなかったと。しかし、イエスの人間性はこの聖書が私たちに明らかにします。人としてこの世にお見えになったこのひとり子のイエス・キリストは、その行為をもってご自分がだれであるかを明らかにされたいし、その行為をもって私たちの罪の贖い主になるといふ、その資格をお持ちであるということを示してくださいました。

2) イエスの行為がもたらした結果

a) 義認による救い=永遠のいのち

さて、このイエス・キリストが為されたすばらしい行為、その行為によって彼が全人類もたらしたものは何だったのでしょうか？「すべての人が義と認められて、いのちを与えられるのです。」とそのように18節に記されています。「義と認められる」とは「正しいと宣言される」ことです。先ほど、私たちは「有罪」と宣告される、「有罪」という判決を受けると見ました。「義とされる」というのは、その神が私たちを「この人は聖い、正しい」と宣告してくださることです。ただ、私たちがこの18節を見て覚えておくべきことがあります。「すべての人が義と認められる」と言ったときに私たちが思うことは、では「すべての」、すなわち、全人類が「義と認められる」、救われると教えているのかということなのです。すでに、私たちが見て来た通り、聖書は決してそのように教えていません。ですから、ある人が説くように「万民救済論」ということ、神はあわれみ深い方だから、究極的に罪人であるすべての人をお救いになるといふ、そのようなことが聖書に教えられているのでしょうか？残念ながら、そのような教えは記されていません。すべての人は罪の中に墮落しているけれど、キリストの普遍的な贖罪によってすべての人が救われるという、そのような考え方は実は聖書的ではないのです。なぜでしょう？この18節にある「すべての人が義と認められる」という、この「すべて」ということばに大切なカギが記されているからです。皆さんは恐らく、これまでローマ書を学んで来て、この「すべて」が全人類を指しているのではなく「救われたすべての人」を指しているとお分かりのことと思います。私たちが繰り返し見て来たように、「すべて」ということばが、全人類を指すのかある特定の人々を指すのか、「すべての人々」が世界中のすべての人なのか、救われたすべての人なのか、同じ「すべて」でもその文脈によって私たちはその意味を理解するのです。

もう一度、ローマ人への手紙1章を見てください。パウロがこのように言っています。1:16に「私は福音を恥とは思いません。福音は、ユダヤ人をはじめギリシヤ人にも、信じるすべての人にとって、救いを得させる神の力です。」と、つまり、主イエス・キリストの為された贖いのみわざ、救いのみわざは、どのような罪人も赦すこと、救うことができます。イエス・キリストの為された贖いのみわざによって、赦されない罪人は存在しません。どんな罪人でもキリストの贖いによって赦されるのです。でも、この救いをいただくためには一人ひとりがこの救いを自分の救いとして受け取る必要があるのです。神に逆らい続けていて、それでも、究極的に神が救ってくれると、そうではないのです。人間にはみな責任があるのです。神に逆らい続けている私たちすべての人間は、神の前に悔い改めて救いを求めて出て行き、この備えられた救いを信じること、その責任があると言っているのです。ですから、1:16でパウロは「信じるすべての人にとって、救いを得させる神の力です。」と言ったのです。続いて、1:17には「なぜなら、福音のうちには神の義が啓示されていて、その義は、信仰に始まり信仰に進ませるからです。「義人は信仰によって生きる。」と書いてあるとおりです。」とあります。「義人は信仰によって生きる。」のです。イエス・キリストを信じる者が義人とされるのです。イエス・キリストを信じる者が罪赦されて、神によって聖い、正しいと宣告されるのです。また、3:21-24にもこのようにあります。「しかし、今は、律法とは別に、しかも律法と預言者によってあかしされて、神の義が示されました。:22 すなわち、イエス・キリストを信じる信仰による神の義であって、それはすべての信じる人に与えられ、何の差別もありません。:23 すべての人は、罪を犯したので、神からの榮譽を受けることができず、:24 ただ、神の恵みにより、キリスト・イエスによる贖いのゆえに、価なしに義と認められるのです。」、ここにも「すべて」ということばが繰り返されています。ある「すべて」は全人類を指しているし、他の「すべて」はある特定の人々を指しているということに、皆さんお気づきになったと思います。ですから、22節に「イエス・キリストを信じる信仰による神の義であって、それはすべての信じる人に与えられ、」とある通りです。「イエス・キリストを信じる信仰による神の義」は「すべての信じる人に与えられる」、この義、救いをいただくためには信じる必要があるのです。

でも、23節にあるように「すべての人は、罪を犯したので、」と、この「すべて」はある特定の人ではなく、全人類を指しています。1コリント15:22-23に「すなわち、アダムにあってすべての人が死んでいるように、キリストによってすべての人が生かされるからです。:23 しかし、おのおのにその順番があります。まず初穂であるキリスト、次にキリストの再臨のときキリストに属している者です。」とありますが、この「すべての人」の使い方の違いはお分かりのことでしょう。アダムによってすべての人、全人類が死んでいる、しかし、キリストによって信じるすべての人が生かされる、救いにあずかるということです。

ですから、もう一度、ローマ書5章に戻って、パウロが教えることは、イエス・キリストの十字架による全人類、罪人へのその贖いのゆえに、信じるすべての人は義と認められる、そこには例外はない、ギリシヤ人であろうとユダヤ人であろうと、異邦人、ユダヤ人という違いはない、すべての信じる罪人に、神はこのすばらしい救いを備えてくださるということです。この18節を終える前に見ていただきたいことがあります。「すべての人が義と認められて、いのちを与えられるのです。」という、どうもこれは

「義と認められる」とことと「いのちを与えられる」とことの二つの結果をパウロはここに記しているかのように思います。確かに、そのように読むことも出来ます。しかし、こうして日本語を見ていると、この二つは別のことを言っているのではなく、間違いなく関連していることが分かります。ここでこの「いのちを与えられる」というのは、その前に記されている「義と認められる」と、「義認」の説明なのです。「義とされる」ことによってもたらされるものを述べているのです。人が罪赦されて義と認められることによって何をいただくのでしょうか？そのことを言っているのです。ですから、パウロは、人が罪赦されて義と認められることによって、永遠のいのちをいただくと教えているのです。それは21節にも記されています。ですから、「いのちが与えられる」とは、義と認められたその結果によって得るものです。

「義認」とは、裁判の場、法廷にあって、裁判長がその人を「正しい、聖い」と宣告してくださる、それだけでないのです。信じる一人ひとりに永遠のいのちのその扉を開いてくださるのです。義とされた私たちはそのようなすばらしい宣告をいただいただけでなく、「永遠のいのち」というすばらしい祝福を主から約束されたのです。主イエス・キリストの一つの義の行為によって全人類にもたらされたもの、それは義と認められることであり、義と認められて永遠のいのちが与えられることです。

b) 義人とされる

そして、19節に「義人とされる」と繰り返されています。「すなわち、ちょうどひとりの人の不従順によって多くの人が罪人とされたのと同様に、ひとりの従順によって多くの人が義人とされるのです。」。先ほど、私たちは「罪人とされる」とは「罪人と定められる、制定される」と見て来ました。この19節には同じように「義人とされる」とあります。このように二つが対比されています。アダムの不従順がもたらしたものは「全人類が罪人と定められたこと」です。では、イエス・キリストがもたらしたものは何でしょうか？イエス・キリストの従順によって信じるすべての人々が「義人と定められる」のです。このように二つの結果をパウロは比較するのです。

私たちが考えておくべきことは、義とされた人々、別の言い方をすれば、救いにあずかった人々、神が救ってくださった人々、その人たちは「義人」とされた訳です。神が「確かにこの人は聖い」と宣告してくださったのです。でも、宣告された者、本当に神の恵みによって救われた者たちは、それゆえに、間違いなく生き方の上に変化が生じて来るということです。パウロはそのことをこれから6章を通して教えて行こうとするのです。というのは、救われていると言っている、実はそうでない人がたくさんがいるからです。ジョン・マッカーサー先生はこのように言います。「キリストによって義とされた人は義なる生活を送る。」と。義とされた者はそれに相応しく生きて行くと言うのです。当たり前なことだと思いませんか？なぜなら、これまで見て来たように、神が私たちを生まれ変わらせてくださったのなら、神が私たちを救ってくださったのなら、その人のうちには神の働きがすでに始まっており、その働きは継続して行くからです。ですから、義とされた者たちは、簡単に言うなら、義を実践しようとする人たちです。

◎義人とされた人の特徴

(1) 義なる生き方をする

Iヨハネ2：29でヨハネはこのように言っています。「もしあなたがたが、神は正しい方であると知っているなら、義を行なう者がみな神から生まれたこともわかるはずです。」、つまり、これが義とされた人の特徴なのです。神の前に正しいことを実践しようとするのです、神が喜んでくださることをしようとするのです。皆さんがご存じのように、悲しいことに、私たちは地上にあって、この罪の性質をもっているために、なかなか神の前に完全に正しい生き方が出来ていません。残念ながら、私たちの心はそのように生きて行きたいと叫び続けても、実際の行動は、私たちがしたくないことを繰り返しています。ですから、私たちが地上にいて、罪のない栄光のからだを待望するということは、ここに理由があるのです。私たちのこの罪のからだは贖われたときに、栄光のからだをいただいたときに、私たちはこの罪から決定的に決別をするのです。罪から解放されるのです。だから、私たちはその栄光のからだを待望するのです。でも、少なくとも、義とされた者たちは義とされた者に相応しい生き方をして、義なる神を喜ばして行きたいと、そのような思いをもっている者たちだと聖書は教えているのです。

(2) 従順な歩みをする

同時に、その人が義とされたということは、その人の生き方が主イエス・キリストの生き方に似ていることによっても明らかにされます。その特徴は「従順」です。先にも見て来たように、主イエス・キリストが地上にいたとき、すべてにおいて従順でした。主によって義とされた私たちの特徴の一つも、主に対して従順であり続けようとすることです。ヨハネ8：47でイエスはこのように言われました。「神から出た者は、神のことばに聞き従います。ですから、あなたがたが聞き従わないのは、あなたがたが神から出た者でないからです。」と、信じたと自称している人々にこのような厳しいことばをお語りになりました。この箇所は8章の31節から話が始まっています。31節には「そこでイエスは、その信じたユダヤ人たち

に言われた。「もしあなたがたが、わたしのことばにとどまるなら、あなたがたはほんとうにわたしの弟子です。」とあります。あなたがたは救われていない、もし、本当に救われているなら、あなたがたは神のことばに従うはずだと言います。つまり、神のおことばに従って行こうとするのが救われている者の特徴だと言うのです。同じヨハネはIヨハネ2：3-6でもこのように言っています。「もし、**私たちが神の命令を守るなら、それによって、私たちは神を知っていることがわかります。**」、神の命令を守ろうとする、それが神を知っていることの証、つまり、救われていることの証だと言います。「**4 神を知っていると言いながら、その命令を守らない者は、偽り者であり、真理はその人のうちにありません。**」、救われていると言っても神の命令を守らない、守ろうともしない、関心もない、そのような状態ではその救いに問題があると。「**5 しかし、みことばを守っている者なら、その人のうちには、確かに神の愛が全うされているのです。それによって、私たちが神のうちにいることがわかります。6 神のうちにとどまっていると言う者は、自分でもキリストが歩まれたように歩まなければなりません。**」。ヨハネが教えているように、イエス・キリストを信じて義とされた者たちの特徴は、主イエス・キリストが歩まれたように、神の前に正しく、そして、神のみことばに従って行きたいと願って生きているのです。悲しいことに、先ほども話したように、私たちは失敗の連続です。悲しいことに、私たちは言わなくていいことを言ってしまうたり、正しいことであっても正しくない言い方で言ってしまうたり、私たちの考えること、想像すること、私たちの心の中を見たとき、それは罪に汚れています。確かに、主によって赦されました。しかし、私たちは余りにも罪深い者であるということを見れば見るほど、そのことに気付かされるのです。しかし、明らかに、救いにあずかった者たちには特徴があります。そのことを私たちは覚えながら、次のみことばを見てください。

B. 比較 20-21節

18-19節で二人の人が行なった行為の結果を対比したパウロは、今度は20-21節でこれまで私たちが見て来た「律法」と「恵み」をもう一度対比するのです。「**律法がはいって来たのは、違反が増し加わるためです。しかし、罪の増し加わるころには、恵みも満ちあふれました。21 それは、罪が死によって支配したように、恵みが、私たちの主イエス・キリストにより、義の賜物によって支配し、永遠のいのちを得させるためなのです。**」、「律法」と「恵み」とがここで対比されています。

1. 律法

1) 違反が増し加わるため

20節「**律法がはいって来たのは、**」、つまり、主がモーセを通してこの律法を与えたときのことで。何のために律法が与えられたのでしょうか？救いをもたらすためではなかったということは明らかです。律法を守り行なうことによってだれ一人として救われる人はいません。一生懸命良い行ないをしても、神が私たちに言われることは「あなたの行ないはまだ不十分だ」ということです。どんなに頑張っても、私たちは自分を満足させることは出来ても神を満足させることは出来ません。だから、救い主が必要なのです。では、救いをもたらさないのなら、律法は何ために私たちに与えられたのでしょうか？パウロはその目的をここで教えているのです。20節の初めに「**律法がはいって来たのは、**」と記されていますが、実はここに大切な接続詞が付いています。その接続詞が意味することは「律法がはいって来た」その究極的な目的は何かということ。それは「**違反が増し加わるためです。**」。ガラテヤ3：19に「**では、律法とは何でしょうか。それは約束をお受けになった、この子孫が来られるときまで、違反を示すためにつけ加えられたもので、御使いたちを通して仲介者の手で定められたのです。**」とある通りです。

「違反」ということばを覚えていますか？「真理から逸れること、脱線すること」です。つまり、律法が私たち人間に与えられたその目的は、私たちがいかに神の真理から逸れているか、そのことを明らかにするためだと言うのです。神の基準が示されることによって、私たちがいかにその基準から外れてしまっているか、そのことを明らかにするためです。私たちがどれ程神の期待、神が要求されているものから外れてしまっているのかということを明らかにするためなのです。人間とはおもしろい者で、例えば「あなたはすべての点において完全ですか？あなたはすべての点において聖いですか？」と聞かれたなら、皆さんはどのような反応をするのか分かりませんが、心の中で「完全ではないな、でも、あの人よりはましかもしれない。この人よりはましだが…」と思うかもしれません。でも、完全ではないということはみな分かります。あのパリサイ人も律法学者でも分かったのです。彼らは自分を義人だと自任していたのです。自分は正しいと思っていたのです。なぜでしょう？そのように行なっているからと言います。

覚えていますか？姦淫の現場で捕まえられた女性が彼らによってイエスのもとに連れて来られました。何のために連れて来られたのでしょうか？イエスを試すためでした。そして、イエスの落ち度を見出して訴えるためでした。ヨハネの福音書8章に出て来ます。その時にイエスは何と言われたでしょう？8：5-7「**モーセは律法の中で、こういう女を石打ちにするように命じています。ところで、あなたは何と言われま**

すか。」:6 彼らはイエスをためしてこう言ったのである。それは、イエスを告発する理由を得るためであった。しかし、イエスは身をかがめて、指で地面に書いておられた。:7 けれども、彼らが問い続けてやめなかったので、イエスは身を起こして言われた。「あなたがたのうちで罪のない者が、最初に彼女に石を投げなさい。」、だれも投げませんでした。なぜなら、みな自分の内には罪があることが分かっていたからです。ですから、人から教えられなくても、自分の心をしっかりと吟味するなら、私たちはその心がいかに汚れているかということに気付くのです。それを何とか直そう、何とか清めようと一生懸命努力しても、私たちの力ではどうにもなりません。そのことには多くの皆さんは気付いています。そして、多くの皆さんはそこで「もういい、こんなことを考えていると気が滅入るし、解決はないからもういい。短い人生を好きに生きて、そして、終わればいいのだ。」と思うのです。でも、この律法が与えられた目的は、私たちがいかに汚れた者であるかということを知らせるだけでなく、そのことを悟らされた私たち一人ひとりが自分で救いを得ることは出来ないことと分かって、ゆえに、神に助けを求める、そのためなのです。

先ほども少し話した様に、パリサイ人は自分が義人であると自任していました。パリサイ人と取税人が祈りのために宮に上った時のことを思い出してください。彼らは非常な自信をもって神の前に立つのです。ところが、取税人はどうだったでしょう？ルカの福音書18章に出て来ますが、18:13「ところが、取税人は遠く離れて立ち、目を天に向けようともせず、自分の胸をたたいて言った。『神さま。こんな罪人の私をあわれんでください。』」、この人は自分を正しく見たのです。そして、その罪に対して自分の汚れに対して彼は正しく応答したのです。先ほども言ったように、人々はいろいろな選択をします。みな自分が汚れていることをある程度知っています。そして、自分が努力しても自分を変えることが出来ない、行ないを少し変えることが出来たとしても、心は変えられない、どうすることも出来ないのだということに気付いています。それでいて心を変えてくださる神のもとに出て行こうとはしないのです。いつまでも、自分の力で自分の意志で自分を変えようとし、そのように問題の解決を見出そうとするのです。この取税人は賢かった。彼は自分に出来ないことをしてくさる神のもとに助けを求めたのです。「こんな罪人の私をあわれんでください。」と言って。イエスは何と言われたでしょう？どちらの者が義とされたのか、どちらの者が救われたのか、それはこの取税人だと言います。

律法が為したこと、それは律法は神の基準を示すことによって、私たちがその基準からいかに外れてしまっているか、神に対して私たちがいかに罪を犯しているのかということをはっきりと示したことです。ですから、自分のことを本当に正しく知っている人は、先の取税人のように「こんな罪人の私を」と言うのです。パウロもそうでした。ローマ7:24に記されているように「私は、ほんとうにみじめな人間です。だれがこの死の、からだから、私を救い出してくれるのでしょうか。」と、私は本当に情けないみじめな者、どうしようもない者だと自分の弱さ、自分の愚かさに気づかせてくれるのです。そして、私たちは「あなたは罪人だ」という神に対して何の言い逃れも出来ないのです。それがこの律法なのです。神の基準に自らを照らし合わせた時に、私たちは神の前に弁解出来ないのです。「確かに、神さま、あなたが言われるように、私はあなたから、あなたの真理から外れています。私は罪人です。」と。もし、そのことに気付いている方がおられるなら、あなたには希望があります。そのようなあなたのことを知って、救いを備えてくださった主の前に立ち返ることが出来ます。ローマ7:24で「私は、ほんとうにみじめな人間です。だれがこの死の、からだから、私を救い出してくれるのでしょうか。」と言ったパウロは続けてこのように言います。25節「私たちの主イエス・キリストのゆえに、ただ神に感謝します。ですから、この私は、心では神の律法に仕え、肉では罪の律法に仕えているのです。」、私は自分を変えることが出来ない、私は自分で自分を救うことができない、でも、神にはそれが出来る。だから、彼は神のもとに救いを求めて出て行くのです。そして、その神を彼は感謝し称えるのです。

律法はこのように私たちの本当の姿を明らかにしてくれます。ですから、神のみことばに自らを照らし合わせて見るときに、私たちはいかに神の前に違反に違反を重ねている者であるかということが見えるのです。パウロが言った通り「違反が増し加わる」のです。「私はこれ位の罪人だと思っていたけれど、神のみことばを見るほどに、どれ程汚れた者であるか、もうどうしようもない者である、救いようのない罪人であることが見えて来る」と。「違反が増し加わって行く、違反が私たちの前に明らかになって行く」、そのために律法が与えられているとパウロは教えているのです。

2. 恵み

1) 赦しをもたらす

そして、彼はこう言います。20b節「しかし、罪の増し加わるころには、恵みも満ちあふれました。」と、「罪」と「恵み」を対比しているのです。確かに、私たちは自分を正しく見ると、どうしようもない罪人であり、パウロのことばを借りるなら「罪人のかしら」です。地獄こそが相応しい罪人です。しかし同時に、そのような私たちに対する神の恵みは、罪以上に満ちあふれている、罪以上にすばらしいもの、偉大なもの、力あるものだとパウロは言うのです。21節「それは、罪が死によって支配したように、

恵みが、私たちの主イエス・キリストにより、義の賜物によって支配し、永遠のいのちを得させるためなのです。」、パウロはここで、読者一人ひとりに対して、私たちが自らの罪深さに気付くとき、この神の私たちに与えられた恵みの偉大さに、どんなに神の恵みが大きいかということに私たちは気付くと教えるのです。皆さん、その通りだと思いませんか！自分の罪がより鮮明に見えて来ることによって、自分が本当に救われる資格のない者だと分かれば分かるほど、私たちは「神さま、どうしてこのような私をあわれんでくださるのですか？ どうして私にこんなにすばらしい救いを備えてくださったのですか？」と言って、この神の恵みをより称える者になって行くのです。パウロが私たちに教えたいことはそのことです。あなたの罪深さが分かれば分かるほど、そんな罪深いあなたに及んだ神の恵みを忘れてはいけません。

チャールズ・ウェスレーは 1749 年 (260 年前)、救われて 11 年目に、ある讃美歌を書きました。讃美歌 62 番です。「主イエスのみいつとみ恵みとを、ことばの限りに称えまほし」、多くの人によって歌われている讃美歌です。彼がこの曲を書くに至ったその経緯ですが、彼が尊敬する一人のクリスチャンのリーダーがこのようなことをこのチャールズ・ウェスレーに言ったのです。「兄弟ウェスレー。主は私の人生に多くのことを成された。千の舌を私が持っていたなら、私はそのすべてをもってキリスト・イエスを誉め称えるだろう」と。日本語には訳されていませんが、その千の舌をもって神を称えるという曲が誕生したのです。その中にチャールズがこのように記したところがあります。残念なことに、日本語ではそれは出て来ませんが、「償われた罪の力を打ち砕き、捕らわれ人を自由にし、イエスの血は最も汚れた者を清め、彼の血潮は私にとって力だ。」と。詩ですが、彼のメッセージははっきりしています。このイエス・キリストはどんな罪でも赦してくださる、私たちがこの方の前に救いを求めて出て行くなら。

2) 永遠のいのちを得させる

もう一つ、21 節の最初に「それは、」という接続詞が出て来ますが、ここでもパウロは最後に「恵みの究極的目的」を記しているのです。それは何でしょう？「**永遠のいのちを得させるためなのです。」**とあります。神は私たち罪人に永遠のいのちを与えるために、すばらしい救いのみわざをなしてくださいました。私たちがその罪から解放して下さり、生まれ変わらせて下さり、私たちに最も相応しくない罪の赦しを、永遠のいのちを与えてくださった、それが神の恵みだと言うのです。その神の恵みを求めて出て来る者に、神はこのような祝福を与えてくださったのです。

5 章の最初にこのように記されていました。5 : 1-2「**ですから、信仰によって義と認められた私たちは、私たちの主イエス・キリストによって、神との平和を持っています。:2 またキリストによって、いま私たちの立っているこの恵みに信仰によって導き入れられた私たちは、神の栄光を望んで大いに喜んでいます。」**、5 章はこのようにことばで始まりました。神によって与えられたすばらしい祝福、すばらしい救いを私は感謝していると。そして、5 章の最後のクライマックスで彼は再び同じことばを繰り返すのです。主は恵みによって、こんな罪深い私にこのような祝福を備えてくださった。それは罪の赦しであり、永遠のいのちである。これが神が私のために備えてくださったものだ。このすばらしい救いを主は恵みによって私に与えてくださった。そして、彼はそのすばらしい主を崇めるのです。

ジュリア・ジョンストンという人が書いた聖歌があります。日本語では「ああ、恵み」という曲です。皆さんも歌われたことがあるでしょう。日曜学校の教師であり、そして、低学年の子どもたちのために日曜学校の教材を準備するという働きをしていました。また、彼女は 500 以上の曲の作詞をした人でした。「罪に満てる世界、そこに住む世人に『いのち、得よ』とイエスは、血潮を流しませり、ああ、恵み ああ 恵み」と続くあの聖歌です。今、1 節を読みましたが、直訳すれば「私たちの愛する主の驚くべき恵み、私たちの罪と罪過に勝る恵み」と、彼女はそうように書きました。4 節には「妙に奇しき愛を、限りなき恵みを、今ぞ、だれも受けよ、ためらわずにそのまま」と続いて行きますが、「妙に奇しき愛を、限りなき恵みを」も直訳すれば、「驚くべき無限の無類の恵み、信じるすべての者の上に惜しげなく与えられる」です。彼女が言っていることはその通りです。まさに、私たちが今日見て来たように、パウロが教えることです。神の一方的な恵みによって私たちは救いを得たと。この賛美のコーラスはこのように続きます。これは彼女が書いたものをそのまま訳します。「恵み 恵み 神の恵み 赦しをもたらす 心を清める恵み、恵み 恵み 神の恵み 恵みは我々のすべての罪よりも偉大だ」と。

だから、私たちはこうして神を誉め称えるのです。こんなに罪深い私たちに神はすばらしい救いを備えてくれたから。備えただけでない、その救いに恵みによって入れられからです。